

# 中央アフリカ共和国へ

小村 幸二郎

中央アフリカ共和国。あまり耳なれない国の名であり日本から最短コースを飛んでも22時間を要する遠い国である。しかしこの国への「人の道」はあまりにも近く善意に満ちた心の和む道であったしその道の果に広がる緑の大地にもやはり人々の善意は満ちていた。調査用車の故障で身動きができずに空しい日を送る私たちを見かねて自分の車を心よく提供して下さった北辺の町 N'dele の県知事さん一枚の写真を撮してもらったお礼にと20個あまりの大きなグレープ・フルーツをもって6km余の日暮れの道を訪れてきてくれたオカミさん 豹が横行し毒蛇がうごめく昼なお暗い密林の中でキャンプ生活を送る私たちを豚 鶏 羊などをもって慰問してくれた村長さん2カ月間の調査旅行を共にしたコックの JEULES 爺さんは Bangui を離れる前日の午後一握りの南京豆 パナナ グレープ・フルーツを手にホテルへ訪ねて来てくれ別れが辛いといいながら泣きじゃくっていた。

はじめて訪ずれたこの国の人々の善意と思いやりは猛獣 毒蛇 ツエツエ蠅などの脅威に絶えず緊張していた私の身と心をどれほど癒やしてくれたかはかり知れない。

ゆるやかにうねる国土をおおいつくすサバンナと密林の緑 色あざやかな大輪の花 照りつける太陽 ありとあらゆる野生動物の群と乱れ舞う鳥や無数の蝶 人々の

やさしい心は きっと こうした美しい自然があつてこそ 古くから 無意識の中に育まれてきたのだろう。目まぐるしく変貌する近代社会の中ではすでに失なわれそして そうした社会の中で生きる誰もが望む美しい自然と人の心が この国では ごく当りまえのものとして 常に育かれている。

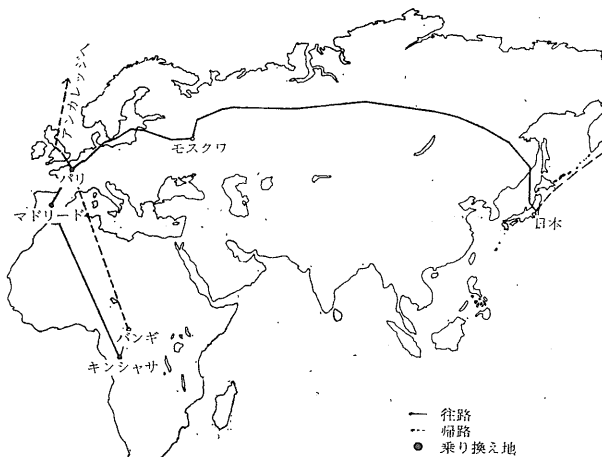
私は この国での3カ月間の生活を通して 近代社会から取残されたような あるいは 隔絶されたようなこの国に 「人間の古里」を見出したような思をした。しかしそれは 心の安らぎを得ることの少ない近代社会の底辺に生きる者の心の逃避を意味するものではなく今はすでに失なわれていると思っていた人の心のあるべき姿を見出した喜びによるものである。

人の心の豊かさにくらべれば この国の文化はあまりにも貧しい。それは 恐らく 自然の恩恵に依存するだけで生きることができた 恵まれすぎた生活環境のせいだろう。古くからの風習を重んじ 狩猟とわずかの農耕とをおもな業としてきた人々は その生活態様を大きく改変する飛躍の文化を創造することがなかった。

これは 農耕民族あるいは狩猟民族に一般的にみられる文化上の共通点であり 騎馬民族ともしっかり異なる点の一つである。

辺境の地に生きるということでは同じである民族の中には しかし 卓越した文化を創造したものもある。

たとえば 天文学を興し 文化史上の一大金字塔と今もなお讃われるサラセン(イスラーム)文化を築いたアラブはその一つの典型的な例である。これら両者にみられる極端な差異はどうして生じたのであろうか。これについては いろいろの解釈が成立つたろうが 生きるために不足のない自然の恩恵による安住の地に生きる人々と 苛酷なまでにきびしい自然の支配下に 大同団結してようやく生きながらえている人々との間の 生きる意欲 より豊かな生活の創造にかける情熱と行動との差異によるとみなすことができるかもしれない。しかし 今日疲れを癒やし 明日の活動に備えて タムタムのリズムにのって歌いかつ



第1図 経路図

踊ることを古くから受継いできたこの国の人々の生活は  
いわゆる先進諸国のこの国への接触が急速に深まりつつ  
ある今日 日増しに変貌してゆくことは間違いない。

文盲率95%といわれたおよそ10年前の教育状況が信じ  
られないほど 現在のこの国では どんな僻地であつても  
も小学校教育は行なわれている。この子供たちが成人し  
この国の発展の眞の活力となる頃には この国の姿は  
未利用資源の開発・利用を基盤とした産業の発展を  
中心に 大きく変わっているだろう。そうした姿は  
従来の農耕民族の域を脱した 眞の独立国としてのこの  
国の将来像には違いないが そこへたどり着く道は 一  
歩一歩あせらずに歩を進めるとしても 苦難に満ちたも  
のであるかもしれない。私は そうした姿の早期実現  
によるこの国の安定を強く望む反面 そのために 美  
くしい自然が破壊され 何の怖れも抱かずに生きている多  
くの動物や昆虫が生きる場を失うことを恐れる。美  
くしい自然が造る景勝の地は 高度に都市化されがたい宿  
命をもち そして 高度に都市化された場所には自然の  
美しくしさは存在しがたい。秘境 それは 心の安らぎ  
を得がたい環境の中で生きる人々にとっては この上  
ない安らぎの場ではあるが 反面 産業の発展を妨げる自  
然の造形でもある。

アフリカ東部のある狩猟民族は 先進諸国のレジャー  
を目的としたハンターの情容赦ない野生動物の射殺によ  
って 重要な蛋白源を失ない ついには栄養失調を余儀  
なくされ およそ10年の間に人口が1/10に減少したと聞  
く。自然を蝕む高度成長の枠の中で生きる人が 人間  
性を取戻す一つの手段として 秘境を訪ずれることはよ  
い。しかし 秘境は 自然の意のままにおかれてこそ  
秘境である。

初の日本人技術者として この国の奥地を 約2カ月  
間にわたって 5,700kmを自動車旅行した私は この短  
かい奥地の旅で また 首都 Bangui での生活の中で  
実に様々なことに遭遇した。自然の美しくいたたま  
いとその脅威 その中に生きる人々の姿 どれもが珍  
しく そして 考えさせられることの多かった初旅であ  
った。

中央アフリカ共和国とは 一体 どういう国なのか  
この旅の見聞を通して 拙ない文ではあるが紹介してみ  
たい。なお 中央アフリカ共和国ということで 読者  
の中には 猛獣の写真や生態記事がふんだんに紹介され  
ることを期待するむきもあろうが 何回かにわたる記事  
の中には そういったものはまったく出てこない。そ

れは この度の旅行が鉱物資源の調査を目的としたもの  
であり また この旅でカメラに納められた数100枚の  
写真の中には そういったものが一枚も含まれていない  
ことによる。

### ザイル共和国の首都 Kinshasa へ

正月早々にヨーロッパへ旅する人は少ないらしく 1  
月6日 モスクワ経由パリ行の日航441便の乗客は35人  
ばかりしかいない。羽田を出て1時間40分の後 日本  
海へ突き刺さるような山を背後に控えた *Yadinka* の上空  
にさしかかると これからソ連領を通過し終えるまでは  
写真撮影は一切禁止である。

シベリアの空はあくまでも晴れてはいるが 褐色の岩  
肌をわずかに残して氷に閉ざされた眼下の風景は無気味  
でさえある。Amur 川も Yenisey 川も完全に凍結し  
はりつめた氷にみられる幾条かの黒い線が 川の存在と  
水の流れる様をわずかに示しているにすぎない。点在  
する円形のさほど大きくない池は隕石が落ちてできたよ  
うな感じである。突然 視界が完全に遮ぎられ 暗い  
雲の中へ突込んだ機体が 大きく揺れはじめた。恐ら  
く 地上では 吹雪が荒れ狂っているのだろう。

明るい空に真黒の煙を吐く数本の大きな煙突が見え  
美しく森と草原と雪にたわむれる人の姿が手にとるよ  
うに見えて間もなく モスクワのシエレメチエボ空港に  
到着した。

モスクワ市街からおおよそ30km 離れているこの空港は  
零下16度という寒さのせいもあってか 実に寒々として  
いる。滑走路の両側にははりつめた厚い氷を熱風で剝が  
ず作業をしている男もグランド・スチュワードも暖かそ  
うな毛皮のコートで身を包んではいるが 機内が程良い  
温度に保たれていたせいも 地上に降り立っても 零下  
16度という寒さは感じられない。

待合室も売店もかなり殺風景で 人影も少なく 数10  
種類の赤表紙の本が書架に並んではいるが それを手  
にとって見る人もほとんどいない。私はその中から  
これから先の機内での格好の読物になりそうな 経済開発  
に関する記事を主とした336頁の 24th Congress of the  
CPSU 1971 を1冊もらった。

栄養が十分に行渡っているらしい グランド・スチュ  
ワードから手渡されたスナック券をもって 待合室の  
隅にある スナックへ行ってみた。カウンター越しに  
働いているオバさんも栄養満点らしい。スナック券と  
引換えにコーヒーをもらって飲む。愛相のよいオバ  
さんは しきりにお代りをすすめてくれたが 辞退した。

午後4時30分 深い霧にすっぽりと包まれた パリの  
オルリー空港に着く。零下2度 夜の訪ずれの早いパ  
リの空の下には もう まぶしいばかりの光の波が揺れ  
ていた。

1月8日午前7時 折よくホテルの前を通りかかった  
タクシーをつかまえて 空港へ向かう。8時を過ぎない  
と夜が明けないパリの町だが 勤めに出る人の波が  
一日のはじまりをそれとなく教えてくれる。町角のス  
ナックで軽食をつまむ風景は どこの国でも同じである。

ブラッセルから来るサベナ航空機の到着が遅れ 結局  
マドリードの空港で 5時間30分も待つことになってしま  
った。そして 強い雨足の中を飛び立った時にはす  
でに4時50分。厚い雲におおわれてジブラルタル海峡  
付近はまったく見えず アフリカ大陸の上空へさしかか  
かった折には快晴に恵まれたものの サハラ砂漠は も  
うとっくに 夕暗の中でひっそりと息づいていた。真  
紅の太陽はなお強烈な光を投げてはいるが その光芒は  
もはや 波打つ砂の海にも峨々たる岩山の頂にさえも  
届いてはいない。

巨大で しかも 歴史の大きな流れを深く秘めている  
この大砂漠の素顔を一目でも見ることを 私は 日本を  
出発する前から強く望んでいた。しかしその望みは  
わずか1時間あまりを空しく送ったことだけで 実に呆  
気なく かき消されてしまった。どんな手段を講じた  
としても過去は甦ってこないとは知りながら 私は 暗  
闇に閉ざされた眼下を見つめて 腹立たしさを覚えた。  
そして一方では ジブラルタル海峡のたたずまいを脳裏  
に描いていた。

ジブラルタル海峡の名を聞くたびに また 見るたび  
に 私は サラセン(イスラーム)帝国の興亡の歴史を  
さりげなく想い浮べることが多い。アラブの軍勢が  
アフリカ大陸北部を席捲し さらにこの海峡を渡って  
ピレネー山脈に至るイベリア半島を手中に納めたこと  
を知っている人は少なくない。しかし この海峡名の由  
来を知っている人は意外に少ないのではなからうか。  
アラブに精通しているある人が 私に 「タラール將軍  
に率いられたアラブの軍勢が ジブラルタル海峡を渡っ  
てイベリア半島の南端部に上陸した折 近くの山は こ  
の將軍の名をとって タラール山と名付けられ また  
海峡にはタラール山海峡という名がつけられた。ジブ  
ラルタルという名は アラビア語のタラール山(Jabal al  
Taral) から変わったものだ」と 語ってくれたことが  
ある。

暗闇の中を飛びつづける旅の無聊を慰めるために 私

は この話を元に 当時の歴史と近世史に書きとどめら  
れているジブラルタル海峡にまつわる数々の出来事に想  
をはせていた。

ぼつんぼつんと灯が見える。赤道を越えて 11時35  
分 ザイル共和国の首都 Kinshasa に着く。気温は摂  
氏20度とアナウンスされたが 湿度が高いだろう。  
タラップを降りて間もなく 汗が吹き出てきた。

空港から市街へおよそ30分の道は ほとんど起伏がな  
く 補装されてはいるが 暗くそして 何となく不気  
味である。午前1時 インター・コンチネンタル・ホ  
テル着 はじめて訪ずれたにしては 少々遅すぎたよう  
だ。Kinshasa で最高級といわれるこのホテルは ザ  
イル共和国でも第一なのだろう オレンジ色を基調にし  
た室内の造りも 調度品も 実に素晴らしく まさに  
豪華ホテルの名に恥じぬ立派さである。しかし ベル  
ギーの植民地として生きてきたこの国のホテルにしては  
備付の石鹸も紙類もアメリカ合衆国の製品である。  
私にはこのことが不思議でならなかったが このホテル  
にはアメリカ合衆国の資本が50%投入されていること  
を知るに及んで その謎は解けた。この国が 今もなお  
ベルギーと密接な関係にあることは当然であるが この  
小さな一つの事実からみても 体質を変えているとみな  
すことができそうである。

### Kinshasa の 午後

1月9日の午後 Congo川の急流を見下ろす丘へ行っ  
てみた。ゆったりと そして 激情のほとぼりかど  
さえ思えるほどの激しさで流れる Congo 川の濁流は  
はじめてその丘に立った私に 様々のことを考えさせな  
いではおかなかった。

この丘へ向かう途中で 客車も貨車も見当たらない 疲  
れ果てたような褐色の細いレールを見た。一見木材搬  
出用の鉄道のような感じだが これこそコンゴ鉄道その  
ものである。このコンゴ鉄道は Kinshasaと大西洋岸  
とを結ぶ動脈ではあるが 物資を毎日輸送しているわけ  
ではない。大西洋岸で貨車積された物資は Kinshasa  
で船積みされて Congo 川を遡り 奥地から Congn 川  
を船で運ばれてきた物資は Kinshasaで貨車積されて  
大西洋岸へ輸送される。これらの物資の積替えに要す  
る出費は大変なものだろう。これほど技術が発達した  
世に 何故 このか細いコンゴ鉄道が動脈としての役目  
を果たさなければならぬのか。近代技術の粋を結集  
してもこの川の急流をなだめることが不可能であるとす  
れば 人の力も頭脳も 自然の前には やはり空しい。

Nail川の源流を求めて 奥地へ向かったまま行方不明

を伝えられていたスコットランドの DAVID LIVINGSTON を1871年 Tanganika 湖畔で見出し Chanbeshi 川と Lualaba 川とが Congo 川の源流であることを発見して Congo 川を 2,570km 下降した英国人の HENRY M. STANLEY の偉大な足跡と情熱とを讃えて名付けられたのであろうこの「スタンレーの丘」に Congo川の急流を見下ろす STANLEY の銅像が建っていることを 私は 数年前から知っていた。そして この銅像の位置から Congo 川を見ることは 短い時間を Kinshasa で過ごす私のささやかな望の一つであった。しかし 私がこの丘を訪ずれた時には STANLEY の銅像は 一片をも残さず 完全に撤去されていた。聞けば つい数日前の出来事だったらしい。この国にとって忘れることのできない先駆者の銅像が完全に撤去された事実を目のあたりにして 私は きわめて複雑な心境にかられ 考えさせられることのあまりの多さにとまどいをさえ覚えた。

Kinshasa での平均水量 40,000m<sup>3</sup>/秒 全長 4,650km アマゾン川と並ぶ流域面積をもつCongo川が 古くから人々の繁栄にどれほど貢献してきたか その偉大さは測り知れないものがある。そしてそれは 現在もそして未来も 変わらないだろう。しかし 一方 この水の豊かさのために 欲望の葛藤を招き ゆがめられた人間社会が 一步また一步 築かれていったとはみられないだろうか。秘められたものがあまりにも多いこの大地と 赤道を2度もまたぎ これをぬって流れるCongo川が 経済的あるいは領土的野心をもつ者に見逃がされるわけではない。約1,500万人といわれるこの国の人口はその約70%を占める 100余の部族からなるバンツ族のほか アザンデ族 ゴンベ族 ビグミー族など 多種多様な種族によって構成されている。そして 原住民のビグミー族は 今では ほんの一握りにすぎない。ビグミー族は 今でこそ赤道アフリカの一部を生活の場としているにすぎないが 古代ギリシアの歴史家が リビア砂漠の奥で 小人を発見した記録があることからみると 当時は アフリカ大陸に広く分布していたらしい。

ビグミーという名がギリシア語で「腕」を意味することからみると この種族の名は 古代ギリシア時代につけられたものであろう。この種族は 元来ごく普通の体軀をしていたが 密林での生活に適應するため 長い年月にわたって 次第に背丈が縮まった 人間の環境順化の一典型例とみなされている。自然の意のままに生きるビグミー族にとって文明はほとんど必要ではない。文明という名の魔物に追われ 欲望の犠牲となって 今は数万人を数えるにすぎないビグミー族は哀れである。

ビグミー族は この地においても あくまでも弱者でしかなかった。近隣諸国からこの地へ移住してきた多くの種族の激しい攻勢の中で 祖先伝来の地を捨てて北部へ移住し 広大なコンゴ盆地に勢力を張ったこれらの種族は やがて それぞれの王国を築いた。こうしてビグミー族の楽園であった当地は 次第に 激動の時代へ入っていった。王位継承問題に基因し あるいは 外国勢力による王の殺害によって これらの王国は相次いで滅亡し 19世紀の初期からはじまった外国人による奥地探検を契機として ヨーロッパ諸国のアフリカ進出の手がこの地にもおよぶことになったが その直接の契機をつくったのは STANLEY である。

STANLEY はコンゴ盆地を中心とする地域一帯の経済的価値を高く評価し その開発をイギリスに進言したが容れられず 時のベルギー国王レオポルド2世のアフリカ進出計画に協力することになった。レオポルド2世はその頃アフリカへの進出を企てていたヨーロッパ諸国間の動きを巧みについて この地に対する権利を主張する立場を得るにいたった。しかし これは虚をつかれたヨーロッパ諸国に容易に受容られるわけがなく 遂にドイツのビスマルクの発案で ヨーロッパ14国の代表がベルリンに集まり 1884年11月から1885年2月まで この国の主権について討議を重ねた。その結果 この国はベルギー国王の個人的主権に属することに決定された。この会議が有名なベルリン会議であるが ここで見落すことができないのは この国の運命が この国への経済的あるいは領土的野心を抱いていたいわゆる先進諸国だけの合意によって 決定されたこと および 国王個人の主権に属することに決定されたことなどである。この決定以後 この国は ベルギー植民地としての道を歩むことになったわけであるが 1946年頃からはじまった知識階級による非植民地化への動き 旧態勢の打破を目標としたルムンバの国民運動に代表される民族主義運動の激しい力に抗することの困難さをみたベルギーの決断によって 1960年6月30日 独立国としての地位を得るに至った。

それは確かにコンゴの新しい夜明けであったには違いない。しかし それにしては 独立後のこの国が迎った道のけわしさは 予想以上であった。1960年9月に発生した軍の反乱 カロンによる「南カサイ鉱山国」の樹立と「南カサイ自治国」・「連邦王国」への改称 それぞれが中央政府を名乗る二つの政権の併存 1961年2月13日のルムンバの殺害 数度にわたる国連軍の介入 チロンベ内閣の実現と グベニューを首班とする「コンゴ

人民共和国」の樹立および両者の対立など その多くが流血を伴う事件であった。そして 1965年11月24日 コンゴ軍は無血クーデターに成功し 当時コンゴ軍最高司令官であったモブツ中将が大統領に就任した。その後 各州から1名と Leopoldville (現在の Kinshasa) から1名 合計22名の閣僚からなるいわゆる「挙国一致内閣」が誕生し 反乱分子とみられた前首相らの処刑 中央政府軍対ベルギー系軍の対立などを経て 1967年11月 国内はようやく平穏を取戻した。しかしこれから後 現在もなお かつての宗主国および親宗主国派に対する一般大衆の批判は厳然として存在する。STANLEYの銅像が撤去されたのもその一つの現われであろうし 私が身分不相応な最高級のホテルに泊ることになったのもこうしたこととまったく無関係ではない。

長い年月にわたって相次いだ抗争は 征服者に対する被征服者の抵抗といったような 単純なものとは考えられない。もちろん対外的にはそうした大問題があったことは事実であるが 内面的に 多くの種族およびパンツ族が100余の部族からなることから分るように非常に多くの部族の宗教・習慣・教育程度・社会理念・体力などの差異、400にものぼる言葉などによるコミュニケーションの困難性があることは確かであろう。そしてまた 豊かな資源の存在が そうしたことと関連して 一層複雑かつ不穏な社会情勢を生み出す一つの理由となっていることも間違いないだろう。

人間の欲望がむき出しになった時 そこには ほとんど例外なく 血腥い弱肉強食が起こる。富に対する欲望 それは より高度に成長した国 あるいは そこに生きる人間に より強い執着心を抱かせる 避けることのむずかしい人間の業である。

Congo川の豊かな流れ ゆるやかにうねる丘 深い緑とその中に建つ白亜の館 Kinshasa の市街は実に美しく 魅力的である。だが その美しさの中に 自由に振舞うことを許さぬ何かがあるようだ。

快晴の一日を Kinshasa で過した私は素晴らしい被写体を随所でみかけはしたが 私のカメラには インター・コンチネンタル・ホテルの美しいプールとそこで水にたわむれる一握りの白人の姿 そして ホテルの窓越しに見える繡酒な白亜の住宅が納められたにすぎない。

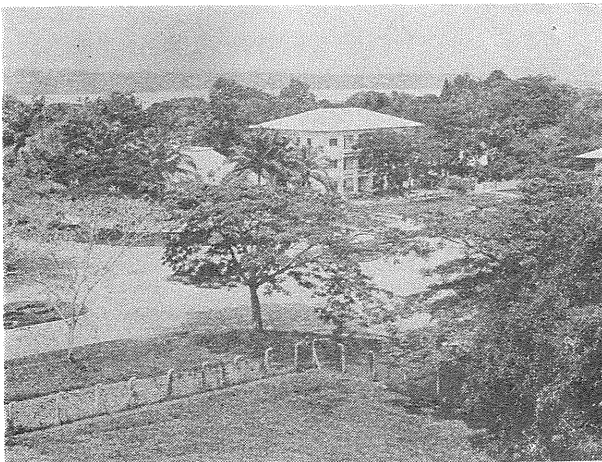
### Bangui へ

目的の中央アフリカ共和国の首都 Bangui へ向かう 1月10日 午前5時に起き 6時40分にホテルを後にした。空港への道はなだらかな草原を突走り 遠くに浮かぶ山々は 墨絵のような美しさである。働きに出る労働者の群が トラックやバスで あるいは 徒歩でひたひたと職場へ急ぐ。すがすがしい草原の朝にみるアフリカのたくましい姿 美しい夜明けである。

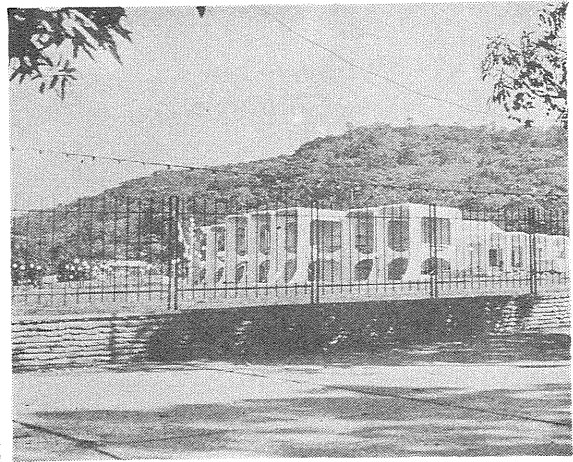
7時40分 Bangui とチャド共和国の首都 Fort Lamy を経由してパリへ向かうアフリカ航空158便は 10人ばかりの客を乗せて Kinshasa を出発した。

Kinshasa から Bangui まで約1時間50分 眼下には赤道アフリカの密林が打続いているはずであるが 厚い雲におおわれてまったく見えず Bangui 到着のアナウンスがあつて間もなく 大きく傾いた飛行機の窓越しに密林の深い緑とラテライトの鮮やかな赤色が見え 広々とした Mpoko 空港に到着した。

窓からみると 背広姿の2人が タラップの横に立っている。わざわざ出迎えてくれた鉱山地質局長の MATHIEU GBAKPOMA 氏と外務省の儀典官である。



第2図 ザイル共和国の首都 Kinshasa の Inter Continental Hotelから見た風景。上方の川(白い部分)は Congo 川 その向うはコンゴ共和国(旧フランス領植民地)の首都 Brazzaville



第3図 大統領宮殿。背後の丘は比高約100mで 一見 鹿児島の城山とそっくりである。

導かれた空港の2階には 水森林 敏山 省官房長の ALEXIS SEBALE氏と顧問の ALBERT ATTIA 氏が 私たちを待っていた。 色鮮やかなシャツを身につけた官房長は 温厚な人物である。 10分ばかり過ぎた頃 Bangui 放送のインタビューがはじまり その間に 儀典官が 入国手続 荷物の受領と車への積込みを すべて終わらせてくれた。 そして 私たちは インタビューを終えて 遂に入国管理を通らず 警官や乗客の視線を浴びながら 役所の乗用車でホテルへ直行した。

Bangui 滞在中の宿舎となった St. Sylvestre Hotel は 建築後10カ月の Bangui では最新のホテルで 大統領官殿(第3図)の正面玄関から徒歩5分ぐらいの所にある。 設備も整い 中庭にプールをもつこのホテルは なかなか住み心地がよさそうである(第4図)。

サンゴ語で「急流」を意味する Bangui は ザイル共和国との国境をなす Oubangui 川の西岸に位置する人口約30万人の首都である。 市街は 外国人の居住区となっている大統領官殿をほぼ中心とする新市街と 現地人の居住区である旧市街とに分かれ 新市街には洋風建築が 旧市街には泥壁に葺葺きの家が立並んで はっきりした対象をみせている。

ある土曜日の午後1時 強い陽ざしを浴びて 新市街へ出てみた。 ちょうど午睡の時刻なのだろう 路上の人影はまばらだ。 ホテルの角を東へ曲って300m ばかり行くと Oubangui 川の岸へ出る。 水の流れがさだかではないこの川はかなりの幅だが 対岸に見えるザイル共和国の家並は近く 音楽さえ聞えてくる。 川岸に立並ぶマンゴの巨木の蔭で川を見つめている私に 岸に停泊している貨物船の甲板に立っている 半裸の男が手を上げた(第5図)。

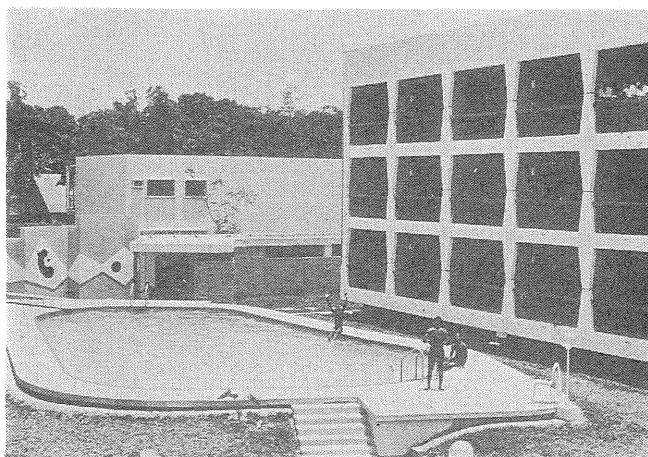
「パラオ(今日は)」  
 「パラオ・ミンギイ(今日は)」  
 「モウ・イエケ・ンジョニイ(元気かね?)」  
 「メルシイ・ミンギイ(おかげさんで)」

木蔭に腰を下ろして 対岸へ向う小舟を見つめていた。 丸木舟らしいこの舟で櫂を操る4つの黒い影は まぶしい光の中を 意外に早く小さくなっていった。 水の流れがあるのかと疑わしくなるほどのんびりとしたこの Oubangui 川も これから上流では 流れが早いために 船の航行は不可能と聞く。

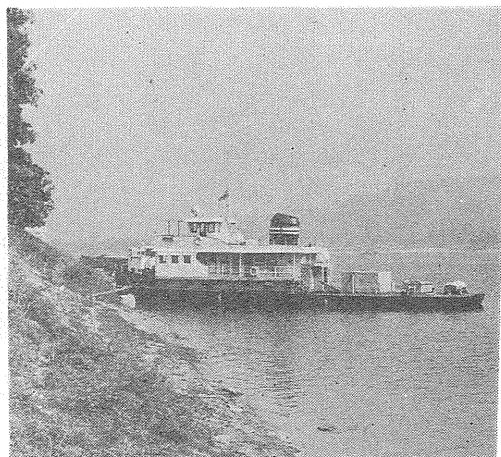
舟が向こう岸に着いた。 私は腰を上げて北へ向かった。 うっそうと茂るマンゴ・椰子・竹など どれを見ても成育がよく 時には 道一杯に黒い影を落している(第6図)。 この国で最高級のサファリ・ホテル(第7図)の見える ダイヤモンド研磨工場の前へ出た(第8図)。 土曜日の午後とあって 人の姿はない。

ダイヤモンド研磨工場の角を曲って ボカツサ市場へ行く。 この市場(第9図)は Bangui の中心部にあり 市民の胃袋の大半を賄っているだけに 予想以上に大規模である。 魚の唐揚げを売っている少年が 「パラオ」と 声をかけてくれた。 この少年とはもうとっくに顔なじみだ。 昨日はいていた半ズボンのはほころび(というよりは破れ)ていたが 今日にはピンク色のイキなのをはいている。 きっと くたびれたズボンを見られてははずかしかったのだろう。

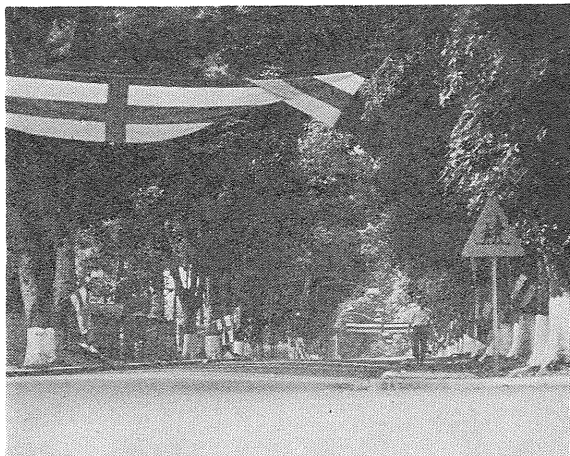
ボカツサ市場の中を通過して 大統領官殿の前へ出る。 大して大きな建物ではないが 実に近代的な造りである。 さして広くない庭園に芝が十分に育っていないところをみると 建築されて間もないのかもしれない。 郵便局の前を通り 外務省へ行ってみる。 アカシア・マンゴ



第4図 Bangui のほぼ中心にある St. Sylvestre Hotel と中庭のプール 宿泊客以外の者が このプールを使用するばあいは 250フラン(325円)の使用料が必要。



第5図 ザイル共和国(川の右側)との国境をなす Oubangui 川と貨物船。



第6図 大統領官殿付近の並木 幹の下1mぐらいが白く塗ってあるのはお祭のため。

などの大木に混って 竹の群生がみられる。建物は中々立派で 大統領官殿に次ぐ美しくさである。ピロテイ式の建物の横の木蔭に 兵隊が立っている。カメラを向けると すかさず ポーズをとってくれた。

「メルシイ・ムツシュ（ありがとう） アドレス・ティ・モウ・ア・イエケエ・イエ（貴方の住所はどこですか）？」

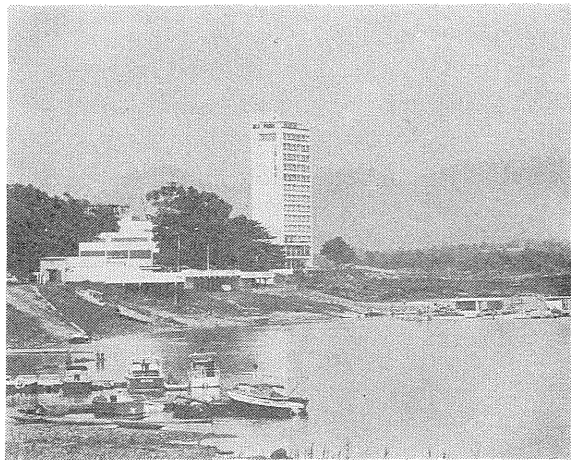
「イリ・ティ・ムビ・ナ・アドレス・ティ・ムビ・ラ（これが私の名前と住所です）」

「モウ・イエケエ・テネ・ヤンガ・ティ・アングレ（貴方は英語を話せますか）？」

「ノン」

「ムビ・イエ・ティ・ゴウイ・ファディ・ソウ（もう行かなければなりません） ゴイ・ンジニ（さようなら）」

どこまで歩いても美しい並木は尽きないが 旧市街まで歩くには遠すぎる。外務省からホテルへ引返すこ



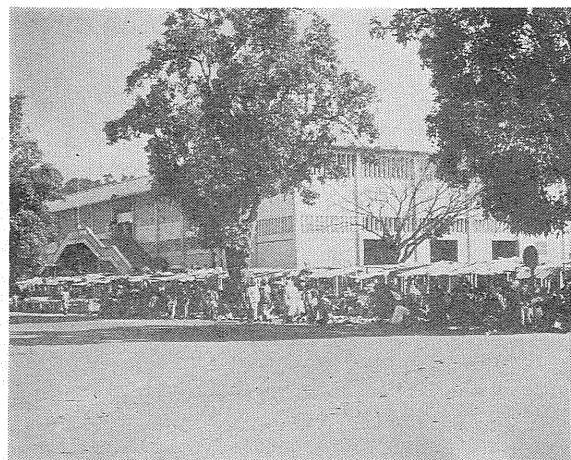
第7図 Oubangui 川畔に建つ最高級の Safari Hotel. 宿泊料は1泊4,500フラン(5,850円)~8,000フラン(10,400円)

とにした。相変らず人通りは少なく 木蔭を選んで歩いても汗が吹き出してくる。商店も扉を閉め 町は完全に眠っているらしい。ホテル近くのスポーツ用品店のショウ・ウインドウに 柔道着が飾ってある。数年前 日本人柔道家が この町で柔道を教えたことがあるそうだから その影響かもしれない。値段は5,400C.F.Aフラン(1C.F.Aフラン=1.3円)だから 邦貨にして約7,000円である。首都にしては店は少なく また 大商店らしきものも見当たらないが これで結構聞にあっているのだろう。

人通りの少ないこの時刻は 暑さえがまんすれば ウインドウ・ショッピングをするのに絶好である。目ぼしい店のウインドウを片ぱしからのぞきながら 私は商品名と値段と可能なかぎり生産国の名をメモしていった。暑い盛りにこんなことをするのは 実に馬鹿げた



第8図 市の中心から Safari Hotel へ向う道路の途中にあるダイヤモンド研磨工場。



第9図 新市街の中心にあるボカツサ(現大統領名)市場 建物の中もすべて市場になっている。並木はマンゴ。

このようだが 調査旅行に際しての物資の購入や 次にこの国を訪ずれるかもしれない調査団にとっては 相当役に立つことだし また この国の経済 とくに貿易 状況を知るもっとも簡便な経済調査の一つである。

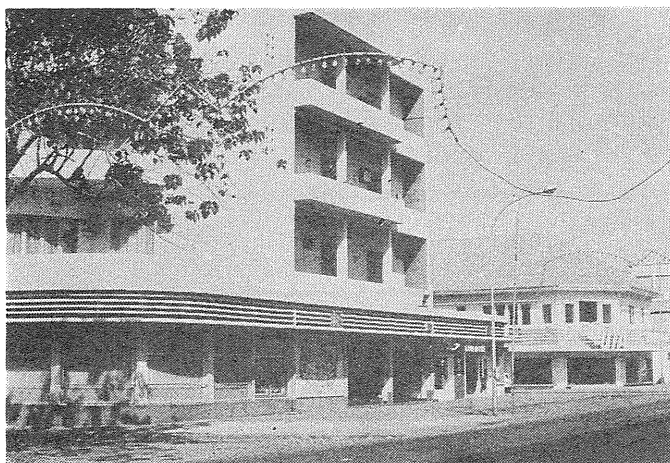
商店街の端まで歩いて Bangui の中心部に当たる 大統領宮殿前の坂道を下りきった所にある ロータリーへ 出た。 英文図書をもつ唯一の機関である「アメリカ文化センター」(第10図)も 扉をかたく閉めている。 このロータリーの角にある New Palace Hotel は Bangui の中心街でもっとも大きな社交場であり かつ 憩の場であるが 今は 客の姿も見当らず ウエイトレスがいかにも所在なげに立っている。 カメラを向けると 心よく応じてくれた(第11図)。

いささか疲れて ホテルへ戻った。 午睡の後のベッドを整えようと 部屋に入ろうとしていたメイドの愛くるしい Shimone が 汗びっしょりの私を見て 「暑いのに何処へ行ったの?」といった眼で にらんだ。 毎日 部屋を掃除したり ベッドを整えたり また サン

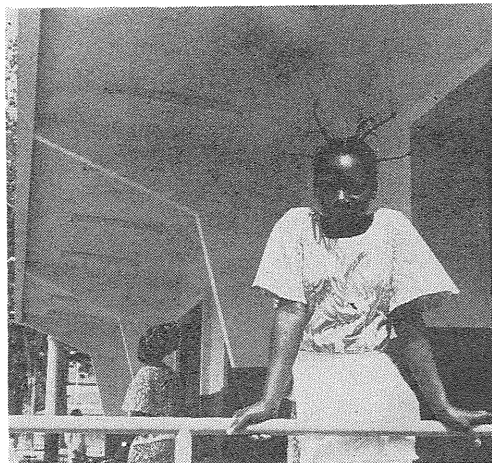
ゴ語の先生の役をつとめてくれるこの少女は 実に気だてがよく なかなか親切だ。 やはり 遠い国から来てくれた人 自分のお客さんということで 精一杯務めてくれているのだろう。 有難いことだ。

やや憶劫ではあったが ダイヤモンド研磨工場のすぐ近くにあるベトナム料理店「金竜餐厅」へ 夕食を食べに行くことにした。 白飯1杯・スープ・小皿に盛られたチャプスイ・ビール1本の代金が2,370円 とてもわれわれ庶民階級の者がたやすく食事できる店ではない。 だが 夕食だけを提供して商売が成立していることをみると この店の愛用者は結構いるのだろう。 変化の乏しい食生活の故か 東洋の味(らしきもの)に魅せられてか または パリ生れのパリ育ちという愛くるしく小柄なマスターの愛相のよさにひかれてか この店の繁盛の秘密はさだかでない。

今日も一日暮れた。 車の音も絶え もの憂いメロディが下のバーから流れてくる。 静かな 本当に静かな アフリカの夜。  
(筆者は 敏床部)



第10図 市の中心にある「アメリカ文化センター」ここは英文書籍・新聞を閲覧できる唯一の機関である。右側の2階建はUTA航空会社支店。



第11図 New Palace Hotel のウエイトレス 多くの女性がこのウエイトレスのように ちじれた髪をのぼして糸できつく巻いている。長い髪に対する女性のあこがれの象徴かもしれない。左側のウエイトレスがかぶっているのは 糸で巻いた髪が折れないようになっている長い帽子。

新刊紹介

工業技術院試験研究所

「研究計画」昭和47年度版

B5判 390頁 定価 1,900円 送料実費

研究機関の特色とポテンシャル 試験研究のプロセスを示し  
また 研究機関の利用の方法等を紹介

昭和47年版「工業技術要覧」

B6判 220頁 定価 1,200円 送料実費

わが国の産業技術開発の現状の諸統計資料と 工業技術院の諸制度ならびに その利用手続き等を収録

東京都港区西新橋2-7-3 第20森ビル  
(財)日本産業技術振興協会 ☎(03)591-6271  
へお申込み下さい。